

APFS大島災害支援プロジェクト 感想2

1日目（2013年11月28日）は午前10時半に他の友人2人とともに大島の港に到着しました。そこは非常に静かでした。明るく、フレンドリーに住人たちは挨拶をしてくれ、レンタカーの運転手に歓迎されました。そこでは、APFSはその周辺を動き回るのに準備をしておいてくれました。午前11時に私たちは大島ボランティアセンターへ行き、到着を報告しました。そこで私たちは紹介を受けた後、私たちのボランティアの目的について短いオリエンテーションをしてもらいました。昼食後午後1時に、私たちはボランティアセンターに戻りました。そこには手押し車やたくさんのショベル、ピックなどが並べられ、食べ物や飲み物を置いておくためのテント、作業服などがきれいに準備してありました。簡単に報告をしたあと、すぐに主な作業場であるホテル椿園に行きました。おそらく元町で最も一流のホテルです。道は1トン分の何百もの砂袋に覆われていて、それに沿って移動しました。私たちはその場所に少しずつ近づくにつれて、恐ろしくなり、目の前に広がる光景を信じることはできませんでした。私は台風による壊滅的な被害に全身が寒く感じました。たくさんの家や家族、隣人、愛する人の命が失われ、家財が全て破壊されてしまったのです。私は痛みと苦しみを感しました。生きて新生活を始め、立ち上がり、特に感情・精神・心理的な苦難に立ち向かうのがどれだけ難しいかを感じました。島の周辺の人々や島の中心部のボランティアは、毎日排水し、生活が完全に元通りになるように人々を励まして手を差し伸べています。老若男女あらゆる市民のちょっとした励ましや情熱が、調和を生み、1つの絆が生まれます。私は、多数の学生たちがボランティアとして貢献していて、熱心に被災者の人々に希望を取り戻させようとする彼らの意気込みに感動させられました。希望や安らぎを与え、分かち合うことは、私たちが何であっても、誰であっても、どこ出身であっても、このようにまったく一緒のことなのです。安心感を持ち、笑顔になってもらうことは、最も貴重な贈り物であり、世界のどこでも誰も買えないものです。ここでの経験は、私が人生において行ってきたボランティアとしての経験で最も心を動かされることでした。私は将来的に喜んで身をささげ、ボランティアをしたいと思っています。そして、どんな犠牲を払っても、いつでもどこでも、より貢献することをお約束します。私は死ぬまで人道的な活動をしていきたいです。

2日目と3日目に仕事をし、それを終え、私はたくさんの願望や希望、夢を得ました。元町での生活が以前のようにもどり、残りの人生を笑顔で送れるように願っています。